

◆ 現状のデータからみえる健康の秘訣は

- 高齢者では血清アルブミン濃度が高い方が長寿である。
- 下肢の運動機能を保つことはQOLの向上に有効である。
- 健康な歯を多く残すと長寿につながるかもしれない。
- 唾液のストレスホルモンは歯周病のスクリーニングに役立つかもしれない。

◆ 参考文献リスト

**アルブミン** Takata, Y. et al.: Serum albumin levels as an independent predictor of 4-year mortality in a community-dwelling 80-year-old population. Aging Clin. Experimental Res. 22 (1): 31-35, 2010.

**QOLと運動能力** Takata, Y. et al.: Quality of life and physical fitness in an 85-year-old population. Arch. Gerontol. Geriatr. 50: 272-276, 2010.

**歯の数と寿命** Ansai, T. et al.: Relationship between tooth loss and mortality in 80-year-old Japanese community-dwelling subjects. BMC Public Health 10: 386, 2010.

**ストレスと歯周病** Ansai, T. et al.: Determination of cortisol and dehydroepiandrosterone levels in saliva for screening of periodontitis in older Japanese adults. Int. J. Dent. Vol. 2009, Article ID 280737, 8 pages.

福岡 8020 調査研究事務局

九州歯科大学保健医療フロンティア科学分野内

〒803-8580 北九州市小倉北区真鶴2-6-1 TEL: 093(582)1131 (内線2102) FAX: 093(591)7736

Home page: <http://www.kenkoyobou.net>

(本ニュースのバックナンバーは“最新情報”の項からダウンロードできます)

はち まる にい まる  
**福岡 8020 ニュース** 第4号  
平成23年3月

九州歯科大学が行ってきた8020(はちまるにいまる)調査について報告します。

九州歯科大学では平成10年から口腔や全身の健康状態と病気の発生との関連について調査してきました。どのような方が、がん・脳卒中・心筋梗塞・肺炎などになりにくいのか、また長寿なのか、について明らかにしたいと考えています。このニュースでは平成10年に始まった調査研究のうち、コホート追跡研究の結果をまとめましたのでご紹介します。

◆ **コホートとは** 専門用語の一つで、研究対象になった集団のことです。また私たちはコホート内で口腔と全身における様々な疾患の発生を把握するための調査を継続して調査しました。これを追跡調査とよびます。

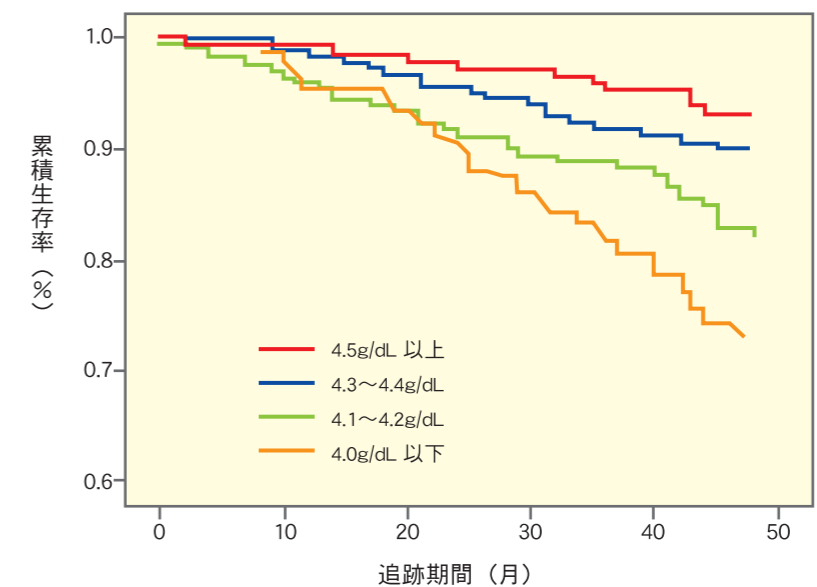
◆ **リスクとは** 専門用語の一つで、危険性のことをいいます。以下の解析では、関連をみたい項目についていくつかのグループに分け、グループごとのリスクを統計方法を使って比較検証しました。

◆ **対象者** 県内9市町村(当時の行橋市、築城町、勝山町、豊津町、新吉富村、豊前市、苅田町、戸畑区、宗像市)に在住する、1917年(大正6年)生まれの方全員を対象としました。検診を受診された697名(男性277名、女性420名)について追跡調査を行いました。今回の解析では平成10年から15年までの5年間の追跡調査ならびに同地域に在住の60~65歳の方(231名)を対象にした断面調査の結果をもとにしました。

① **アルブミンと生存率の関係**

福岡県在住の80歳高齢者の方672名の生存・死亡を4年間追跡調査しました。107名の方が死亡しました(がん27名、心血管病27名、肺炎22名など)。図1のように血清アルブミン濃度が高い人ほど生存率が高いことがわかりました。血清アルブミン濃度が一番高い正常者グループに比べて、一番低い群は10.7倍、二番目に低い群は3.1倍死亡率が高い結果となりました。このことから、後期高齢者の80歳者では血清アルブミン濃度がその後の生存率のよい予測因子となることがわかりました。

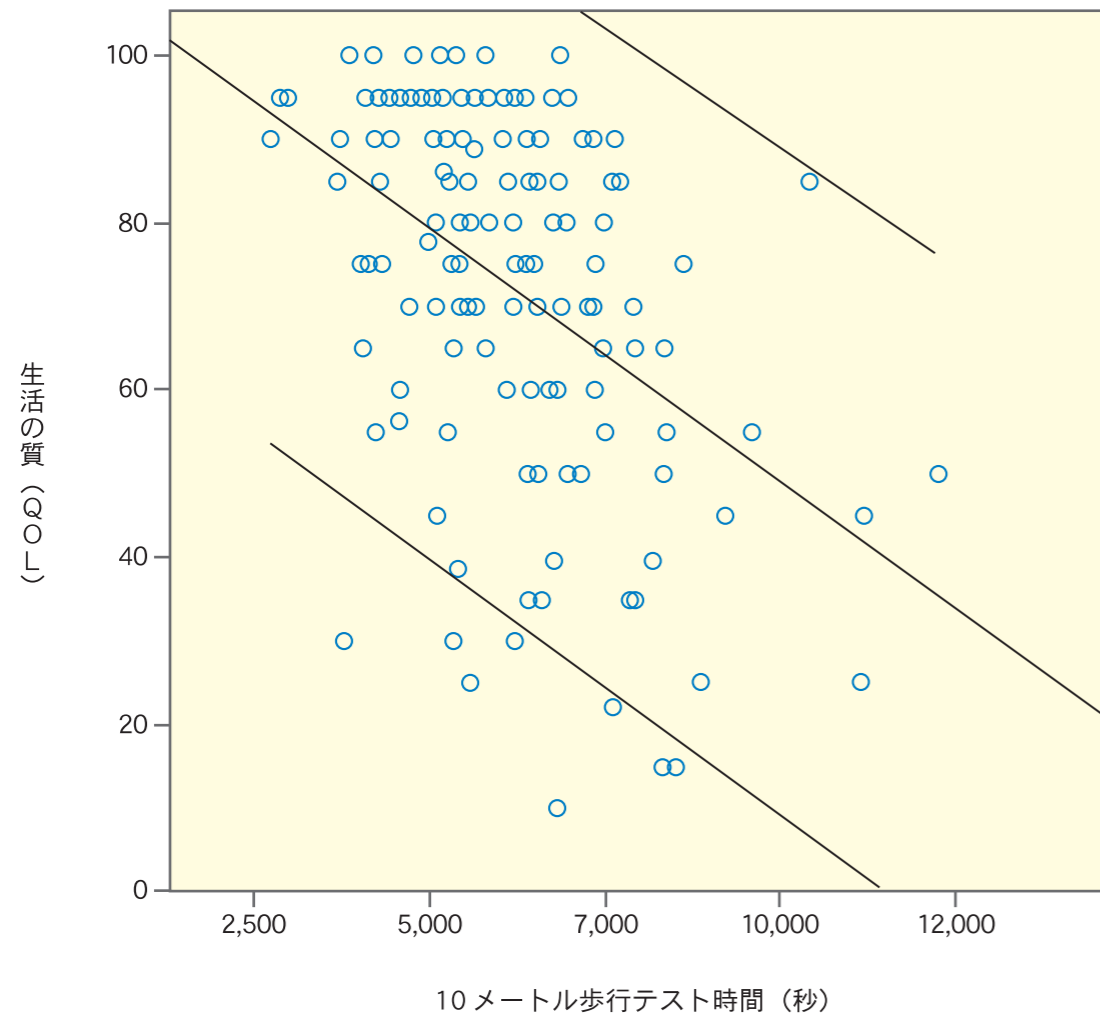
図1 血清アルブミンと生存率の関係



## ② 生活の質 (QOL) と運動能力の関係

福岡県在住の80歳高齢者の方207名の方の運動能力(握力、下肢伸展力、開眼片足立ち、下肢ステップ)と、この方たちが85歳になった時の生活の質(QOL)との関係を検討しました。図2は、10メートルを歩いた時の速度と生活の質を測定するSF-36のなかのPF値(身体機能)がよく相関することを示しています。PF値やRP(日常役割機能)、BP(体の痛み)といった身体的QOLがRE(日常役割機能)、MH(心の健康)の精神的QOLよりも密接に運動能力との関連が認められました。運動能力の中では、歩行速度や下肢伸展力がQOLとの関連が深いようでした。このことから、80歳の後期高齢者でも、運動能力特に下肢の運動能力を高めることはその後のQOLを良好に保つため有効であると思われました。

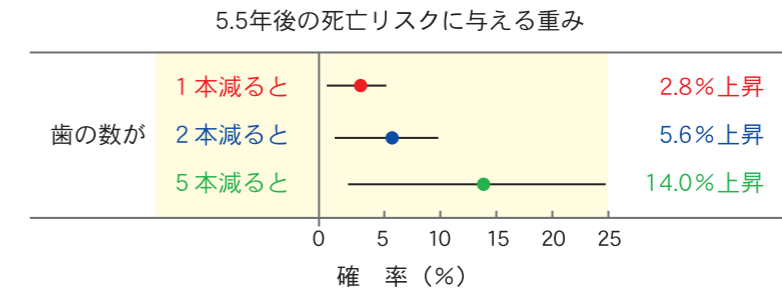
図2 生活の質(QOL)と運動能力の関係



## ③ 歯の数と寿命の関係

福岡県在住の80歳高齢者の方697名を対象にして、5.5年間の追跡調査をしました。歯の数と寿命の関係を調べたところ、歯の数が多いほど寿命が長いことがわかりました。歯を1本失うと、寿命が2.8%低下する計算になります(図3)。したがって5本の歯を失うと長生きする確率が14%低下することになり、歯を大事にして健康な歯を多く残すと全身の健康維持にも役立つことがわかりました。

図3 歯の数と死亡リスクの関係



※図中のバーは95%信頼区間を示す。

## ④ 歯周病とストレスマーカースの関係

歯周病の原因のひとつにストレスの影響が知られています。そこで地域在住の60~65歳の方231名を対象にストレスマーカーとしてよく知られているコルチゾールとDHEAの唾液中レベルをもとにして歯周病の病態との関係を検討しました。その結果、唾液中のコルチゾールでは感度63%、特異度71%(カットオフ値2.1ng/mL)、およびDHEAでは感度67%、特異度66%(カットオフ値60.2pg/mL)というように歯周病の状態をある程度把握することができることがわかりました(図4)。これらのことから、集団検診の現場でのスクリーニングテストのひとつとして、唾液中ストレスマーカーを用いた歯周病検査が有効である可能性が示唆されました。

図4 歯周病の判定に用いた場合の感度と特異度(非喫煙者の場合)

